

濟定檢省部文

株式會社普及編輯所編

國語讀本

尋常小學校
兒童用

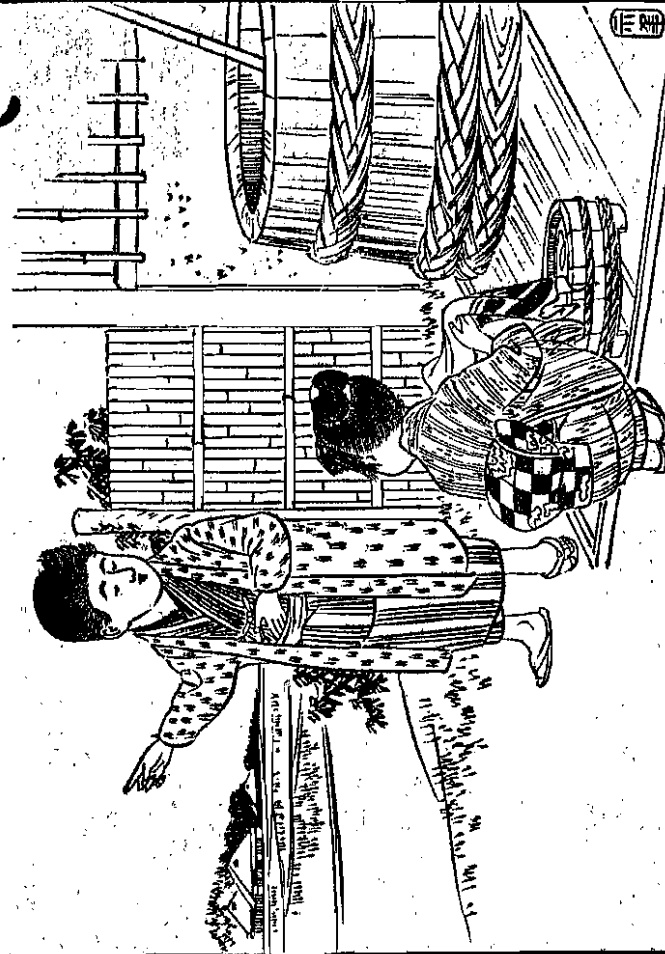
東京 株式會社普及舎

國語讀本 尋常小學校用 卷二 目次

だい一	ひのて	二	だい十三	しんねん	二十四
ダイ二	ニハトリ	四	だい十四	ゆきのあと	二十六
だい三	がっこう	五	だい十五	ありとせりせりす	二十八
ダイ四	アソビ	六	ダイ十六	ウツシタロー	三十
だい五	てんちやーせつ(一)	八	ダイ十七	カメトウサギ	三十二
だい六	てんちやーせつ(二)	十	ダイ十八	ウメニウグヒス	三十四
だい七	れんしゅー	十二	ダイ十九	ジシムテシノー	三十六
ダイ八	カナリヤ	十三	だい二十	もも太ろー(一)	三十八
だい九	たま	十四	だい二十一	もも太ろー(二)	四十
だい十	ちよーれん	十五	だい二十二	もも太ろー(三)	四十二
ダイ十一	スナ	十六	ダイ二十三	ヒナサタ	四十四
ダイ十二	年	十八	だい二十四	一年生のをほり	四十六
ダイ十三	年	二十	れんしゅー		四十八
ダイ十四	年	二十二			五十

省書檢

た、その
 れが、
 お世たは、
 こりあ
 はあ。

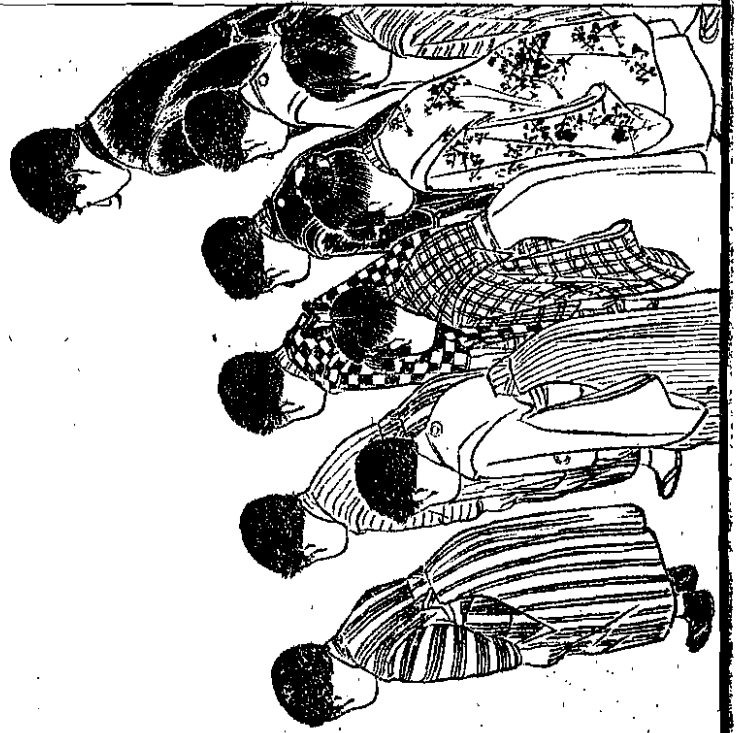


あ、
 あ、
 ああが、
 ああから
 のぼる。



たさか へんかちーかち (二)

ガッコー
ハ、キンカヨ
マカダクカ
イハヒマ
タシタ。



めさかち
ちちに
あかち

めさかち

さしき

さしき

38-3

文部省檢定

株式會社普及舎編輯

國語讀本

尋常小學校
兒童用

東京 株式會社普及舎

國語讀本 尋常小學校用 卷三 目次

だい一	ほーがく	二
ダイ二	日ト風ノカクズ	四
だい三	お月さま	七
だい四	春の野	八
	レンジャー	十
	ウインドクアイ	十二
	したきりすずめ(一)	十二
	したきりすずめ(二)	十四
	したきりすずめ(三)	十七
	コヒノボリ	十七
	おはるのうた	二十
	れんしゅー	二十二
ダイ十	太郎ノハタチ	二十四
ダイ十一	かじり	二十五
だい十二	田うら	二十六

だい十三	せんせふ	三十一
ダイ十四	小サイノネ	三十四
ダイ十五	海	三十六
	レンジャー	四十
だい十六	七よー日	四十二
だい十七	くだもの	四十四
	れんしゅー	四十六
ダイ十八	アキナヒアソビ(一)	四十九
ダイ十九	アキナヒアソビ(二)	五十一
ダイ二十	鳥ノ王	五十四
	れんしゅー	五十六
だい二十一	牛若丸(一)	五十七
だい二十二	牛若丸(二)	六十
だい二十三	牛若丸(三)	六十三
	れんしゅー	六十六

57

2-1
47-3

東京 普及舎

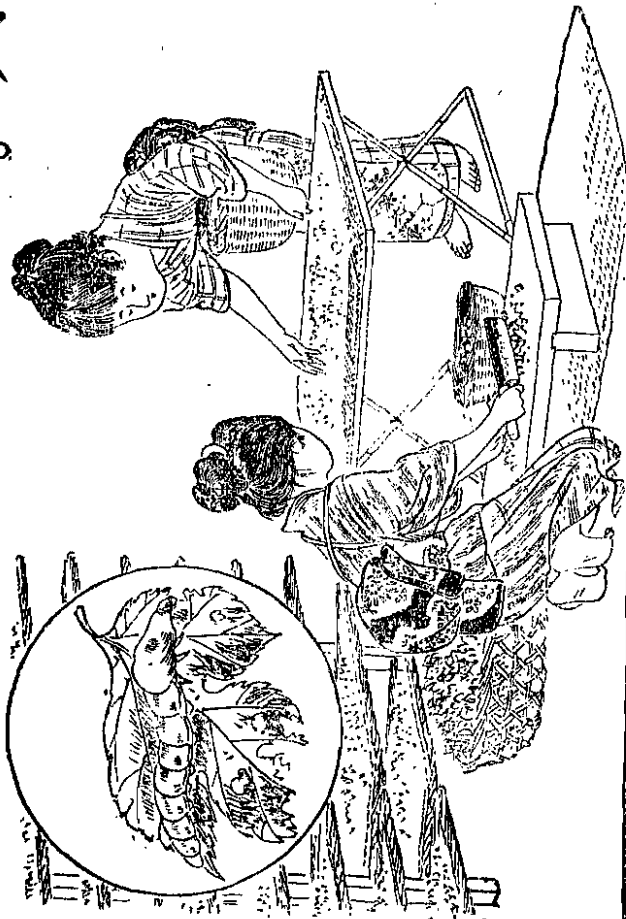
ダイ十 太郎ハタケ
 太郎ハ草花ガスキ
 テアリマスカラには
 ノスニハサナ畑ヲ
 コシラケテおそがほ
 ノたねヲマキマシタ。
 十日ホドタツテヤ



ウヤクメヲ出シマシタカラ、太郎ハ毎
 日がつこーカラカへルト草ヲトリこ
 やシヲヤツテダイセツニシタデマス。
 太郎ハゴノ草ニイツゴロ花ガサク
 カト指ヲリガツヘテマツテキルデア
 リマセウ。

ダイ十一 カヒコ

姉ト妹ト二人テ
 かひこヲカヒマス。
 姉「おはるねん私
 かしは、はヲササ
 ムカフ、オム、ハシ
 レヲクビツテクダ
 サイ。

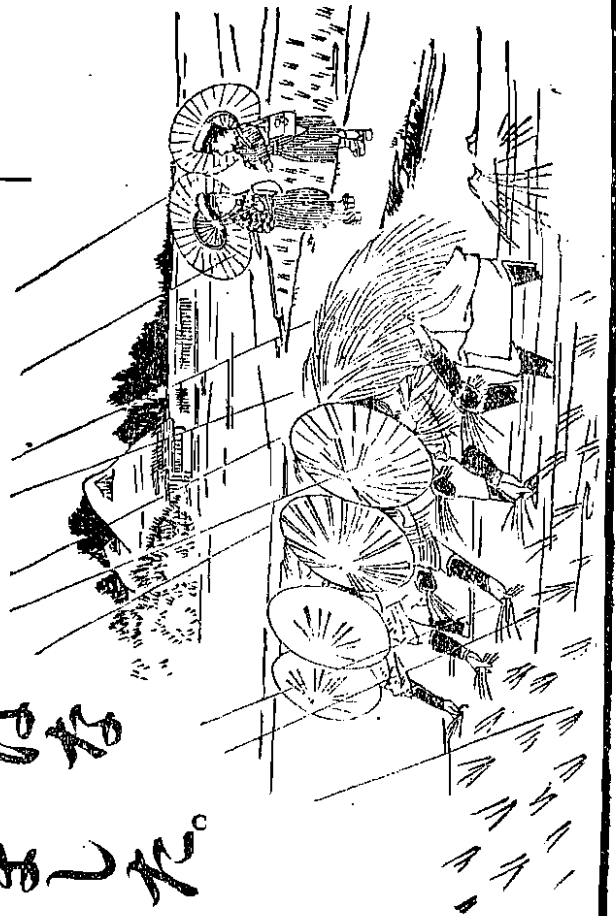


姉「ねーせんコノからハイク日タ
 ツト、まヨヲツクリトセカカ。
 姉「三十日ハカリタテ、まヨヲツク
 リマス。
 ソノまヨカラヒサ出ツタ糸ヲ生糸
 トイフ、ね、ね、ね、ハコノカラシ
 クツタモノデアリマス。」

ある日次郎は兄とらつしとに野ぐ
をとほりますとわちーと田うゑの
中であります。

田にをる人々はみなかさをかり
三ノをきりアメにぬれながら苗を
あてをります。

兄は「私などが毎
日たぐる米は、ト
アがあのよーにせ
るをだして作つた
ものだから、つら
でもきつにしてはな
りません」とあうしめました。



文
申

次郎はこれを見せたらそーかん
しんして私は兄サトのおつしやうた
ことを文にかきおすからなほしてく
ださいと申しました。

私らが毎日タビミ米の一等が十ハサツ
作ッタモノタコタコカベノミハサツ
ツニツタハタコタコ。

金
魚
水

たう十三 せうせう

今日は日なりがよくてあたから
から二ハのイタにたしれんの金魚が
うかび出ました。

次郎は兄とらつしよに金魚が水の
中をじゆーにおちおちはつてゐるの
をおもしろそうにながめてゐました。

文部省檢定

編輯所 普及會社株式

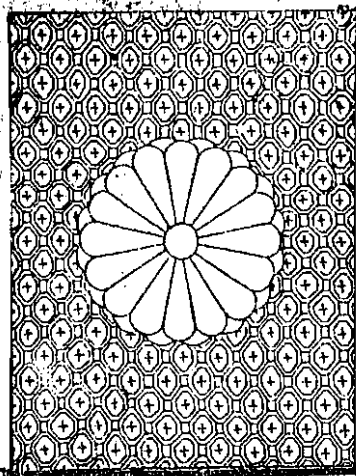
國語讀本

尋常小學校
兒童用

東京 普及會社株式

國語讀本 尋常小學校用 卷四 目次

第一	わが家	二	第十四	年ノク	三十八
第二	うぢがみ	三	第十五	新年	四十二
第三	天長節	六	第十六	雪窓大窓	四十五
第四	日の丸のはた	八		れんしゅー	四十八
第五	菊ノ花	十	第十七	小川藤吉郎	四十九
	レンシユー	十二	第十八	梅	五十二
第六	ヲヂノオクリモノ	十三	第十九	天満宮	五十五
第七	富士ノ山	十六		レンシユー	五十八
第八	つき山	十九	第二十	徳川イヘヤス公	五十九
第九	山ビコ	二十二	第二十一	本多平八郎	六十二
	レンシユー	二十六	第二十二	じこーのかはり	六十四
第十	獸ノ王	二十七	第二十三	四季のたのしみ	六十七
第十一	わにとりてん(一)	二十九		レンシユー	六十八
第十二	わにとりてん(二)	三十三			
第十三	わにとりてん(三)	三十五			



ノごもんニハコノ
花ノ形ヲ才用ナ
ソバサレマス。
レンジュー

ワガ家ニハ祖父ト父母ト兄トガアツテミナ、
ワタクシヲカハイガツテ下サイマス。
アレバがつこーカラカベルト時々うぢが

みえまぐオマナリタイタシマス。
菊の花には、赤、白、黄などがあります。
天皇陛下のゴモニには、菊の花の形をお用
あそばされます。

第六 ラヂノオクリモノ

太郎ガ學校カラカベルト、どんたい
ニヲルをぢノトコロカラ、天長節ノ



オヨロコビ
 ダトイツテ、
 ニ枚ノせき
 ばんゑヲオ
 クツテクレ
 マシタ。
 一枚ノゑ

清陸軍兵士

他

敵

ハ日清せんそーノ中、太平山ノタタカ
 ヒデ、ワガ陸軍ノ兵士ガ、オホエキラヲ
 カシテイサマシク、てきぐんヲウチヤ
 ブラウトスルトコロデアリマス。

他ノ一枚ノゑハ、黄海ノタタカヒデ、
 ワガ海軍ノ兵士ガ、十ソーアマリノ軍
 かんニノリコソデ、敵ノ軍かんヲウチ

シツメヨウトスルトコロデアリマス。

太郎ハ手ヲウチコエヲアゲテワレ
モハヤクオホキクナツテツヨイ軍人
ニナリタイモノダト申シマシタ。

富

第七 富士ノ山

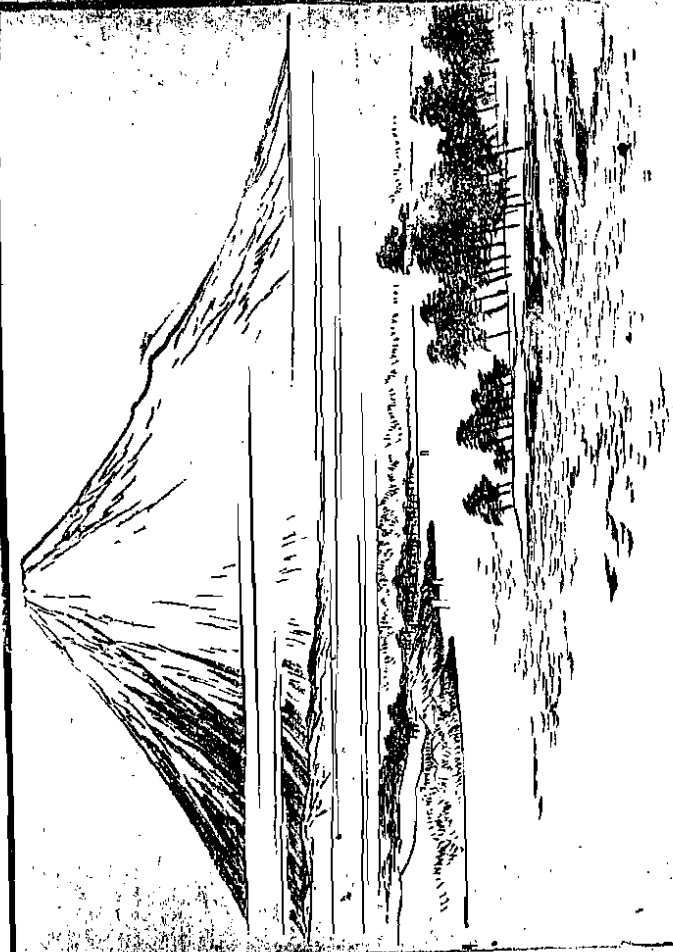
高

富士ノ山ハワカ日本デ一バン名高

美

イ美シイ山デアル。

夏



スベテ高イ山
ハサムイモノデ
アルガコノ山モ
タイツ一高イカ
ラツノ心ただき
ニハ夏ノアツイ
時デモゆきノキ

文部省検定済

株式會社普及舎編輯所編

國語讀本

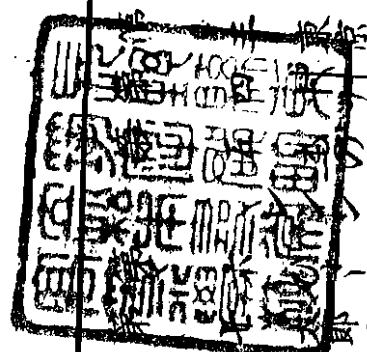
尋常小學校
兒童用

東京 株式會社普及舎

國語讀本 尋常小學校用 卷五目次

第一	大日本帝國	二	第十三	金剛石	四十
第二	やまとたけるのみこ	三	第十四	大阪	四十二
第三	東京	七		レンシエー	四十四
第四	カ	十一	第十五	仁徳天皇	四十五
第五	いふ木ぎれ	十五	第十六	こぶとりのはなし(二)	四十八
第六	エー	十八	第十七	こぶとりのはなし(三)	五十二
第七	りんがらりんか	十九	第十八	空中ノ水	五十七
第八	養蠶	二十		れんしゆー	五十九
第九	茶	二十六	第十九	ほしのうた	五十九
	レンシエー	二十九	第二十	人形の著物	六十二
第十	貯金	三十三	第二十一	家業	六十四
第十一	シホバラ多助	三十三	第二十二	陸軍エンシエー	六十六
第十二	日々のつとめ	三十五		レンシエー	七十
		三十八			

12/ 1 38-5



2-1 47-5

太郎ハゴノ返事トにしゑゑトテ父母ニ
見セマシタラ父母ハ太郎ノ手紙ガヨク用
事ヲタシタゴトラホメテ手紙ハゴノヨ一
ニ便利ナモノデアルカラ時時オケイコラ
シナサイトサトシマシタ。

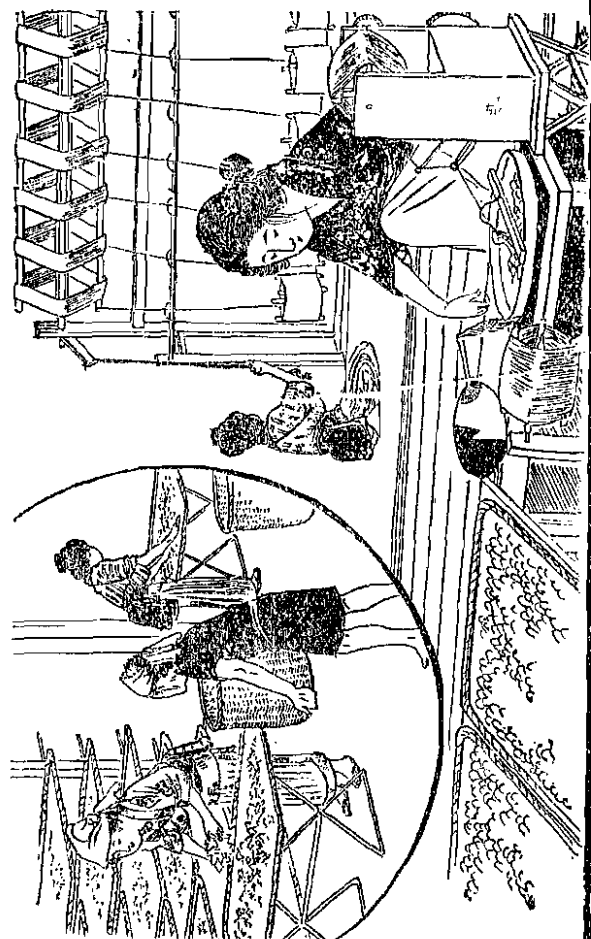
第八 養蠶

蠶ヲカフニバツノ卵カラカへルノヲム
スコレヲかごニウツシコトカニギザバタ

桑ノ葉ヲマイテヤル。

ソレカラ蠶ガオホ
キクナルニツレテオ
ヒオヒニアラクギザ
ンダ葉ヲアタベマタ
かごノ數ヲフヤス。

カヨ一ニシテ七八
日タツト蠶ハ桑ノ葉



皮
度
眠

ヲ食フコトラヤメジツカニヤスンデツノ
身ノウスイ皮ヲヌギカヘルコレカラ後モ
七八日目毎ニヤスムコトガ四^三度アルコレ
ヲ蠶ノ四眠トイッテラル。

蠶ハ四眠ノ後七日ホドタツトツノから
たガスキトホツテ桑ノ葉ヲ食フコトラヤ
メル。コノ時わらナドテまぶしヲコシラ
テ蠶ラツノ中ニ入レルト蠶ハ糸ヲハイテ

まゆヲ作ル。

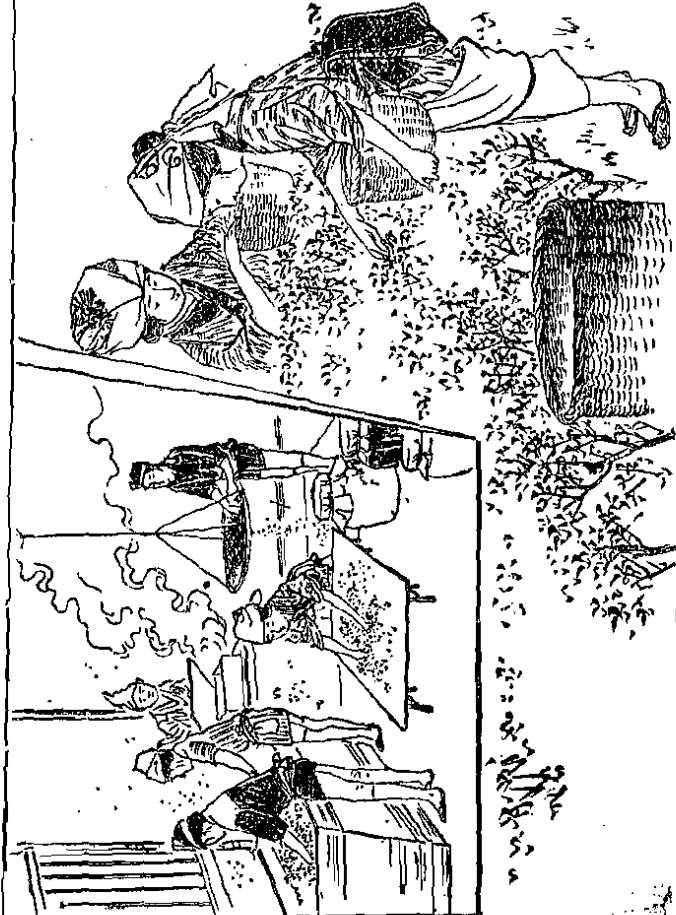
産
茶

まゆヲニテトツタ糸ハコレヲ生糸トイ
テウガ國ノ名産デアル。信濃^{シナノ}上野^{カミノ}ナドハツ
ノ名ガイチバツ高イ。

第九 茶

わが國にはよい茶がたんとできて年
年外國へたんとおくり出します。

茶のこしらへ方は毎年五六月ごろに新



芽をのみ取つて
イローでもじすこ
しおんでボイロに
かけ茶にちりなが
らほしあげるの
であります。

これをのびは
キユースに入れて

湯をええお出す。また、井茶をういてお白で
ひいて粉につくり湯にかきたてて用ゐる
のもありおす。茶は、よくほじくのめば食物
のこなれをおくしまたねあげられおすこ
ーのーがおります。

新茶をおくる

この茶は私方でもしつたものになり
おするのすこしはかりれし上げおす。

38-6
濟定檢省部文

株式會社普及舎編輯所編

國語讀本

尋常小學校
兒童用

東京

株式會社普及舎

國語讀本 尋常小學校用 卷六 目次

第一	三種の神器	三	第十三	山林	四十一
第二	金色の鴉	五		レンシユ一	四十四
第三	日清戦争	八	第十四	炭坑のはなし	四十五
第四	航海	十二	第十五	汽車ト汽船	五十
第五	商業	十五	第十六	出立の知らせ	五十二
	れんしゅ一	十八	第十七	家畜	五十三
第六	讀本の註文	十八	第十八	ワガ國ノ農業	五十六
第七	はかりの道具	十九		レンシユ一	五十八
第八	京都	二十三	第十九	にのみぎんじろ一(二)	五十九
第九	桓武天皇	二十五	第二十	にのみぎんじろ一(三)	六十三
	レンシユ一	二十八	第二十一	父母の恩	六十六
第十	きよ一おほさかのかる	二十九	第二十二	わが大君	六十九
第十一	郵便と電信	三十四		レンシユ一	七十一
第十二	三韓征伐	三十九			

おえヲサハカキタジ、三韓ヲホロホサシト
 テ武内宿禰ヲトハカ
 リ男ノヨソホヒヲナ
 シ舟ニシテヲヒギキ
 テカノ國ニ渡リタマ
 ヒタリ。三韓トハしら
 せしむるなりナドヲ
 イヘル名ニテ、今ノ韓

國ノ地方ナリ。

しらせ王ハクガ軍ノ武勇ニオツシナガ
 ククガ屬國トナリ、ミツギモノヲ奉ルベキ
 コトラチカヒテ降参ラネガヒ出テタリ。こ
 めしむるハニ王モマタツイテ降参セルカ
 ハ、三韓ハ全ク平キタリ。

第十三 山林

アレヲノツネニ住ミテ牛ル家モ日々用

勇

屬

參降

全

住

斗ル道具ナドモタイテイ樹木デツクツタ
モノデアアルコノ樹木ノハエテ斗ル所ヲ山
林トイフ。

山林ハカヨ一ニ有用ナ樹木ラツクルハ
カリテナクソノ土地ガ冷カデアアルカラ空
中ノ水蒸氣ガココデコリカタマツテ雨ト
ナル。山林ノアル地方ニ雨ノ多イノハコノ
シヨ一コデアアル。



山林ハマタ水分ヲ
タクハベテオイテシ
ヅカニ流レ出サセル
カラ山林ノ多イ地方
ニハ大水ガ少ナイマ
タ河ノカレルコトモ
ナイツレユエ山林ハ
ニタリニ伐リアラス

コトナク伐ツタトキニバアラタニ出ラウ
エツケルヨ一ニ氣ヲツケネバナラフ。

レインシエー

昔ハ郵便ノマウケガナカッタカラ一通ノ手紙
ヲ送ルニモタクサシ十日數ト手數トガカカッ
タガ今ノ世ハ文明ノアリガタサニカヨ一ニ便
利ナモノガデキテワヅカノ間ニ何百里ノトホ
イ處マデモ通信スルコトガデキルノデアル。
先日註文した三韓征伐の繪本はまだ届きませ
んが何がゆきちがひはありませんか。おしるべ

下さふ。

山林ニ樹木多キトキハ雨降リテモ川水ノアフ
ルコト少ナクマタびでりニモ水ノカルルコ
ト少ナシコレ山林ハ水ヲ貯ヘオキテ一時ニ流
レ出デシメザルニヨル。

第十四 炭坑のはなし

坑

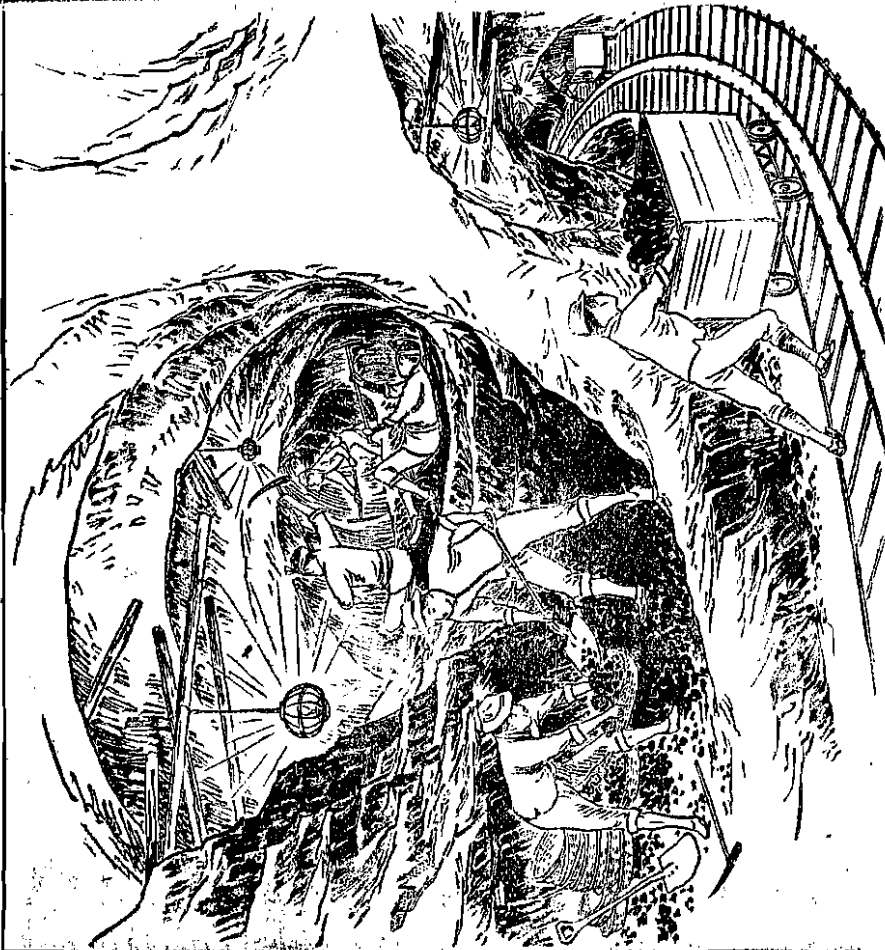
井

ある日私は父にともなはれて石炭坑を
見にゆきました。坑の口には井戸車のツル
べのよーにクサリでつるした箱がありま

すこの箱は人の上り下りにつかつたりほりつた石炭をつみ出したりするものでありました。

私どももこの箱にのつて下りましたが、だんだんといろくなつてやがて三四百尺も下つたと思ふころやうやく坑の底にとどきました。

ここには燈火がちらちらとかがやいて



をってあたりがおぼろげに見えま
す。四方に横
坑があつて、
狭いトール
がしてあ
るのやまた

坑の中から石炭をのせた車のはしって出るのがわかりました。

私どもは箱から出て燈火をたづさへて東の横坑に入りました。その時坑夫らは背をかかめたり地上に横たはったりしてツルハシをもつて石炭をほりつつてをりましました。

それからこの横坑を出て他の横坑に入

音奥

らうとしますと坑の奥からからからと音をぞせて石炭をのせた車が出て來ましたからそこに入るのをやめてまへの箱にのつて外に出ました。

坑夫の話しによると坑の内は空氣がわるいが他から思つたよゝに苦しくはない。ただおそろしいのは君などがおちて來て生きうめにされるのである。とのことである。

りました。

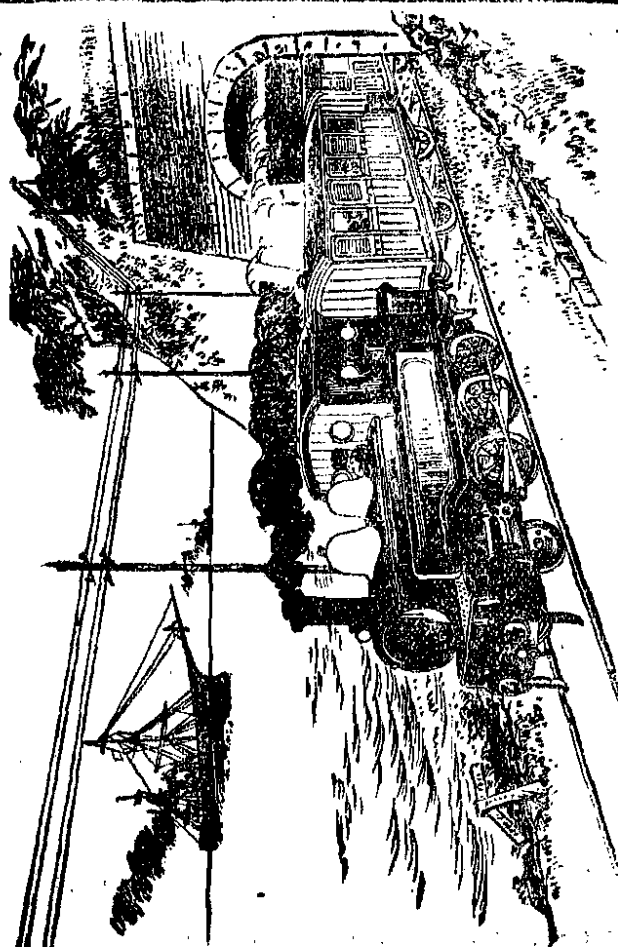
第十五 汽車ト汽船

汽車ハ通常機關車客車貨車ノ三部カラ
 テキテ成ル。機關車トイフノハ蒸氣機關ヲ
 ソナヘタ車デアツテコレテ汽車ヲ動カス
 ノデアル。マタ客車ハ旅人ヲノセ貨車ハ荷
 物ヲノセル車デアル。

汽船ハソノ大サト作り方ト二種タアル

ガ通常機關室客室貨
 物室ナドノ區別ガア
 ル。

汽船ガ發著スル所
 ハ港デアツテ汽車ガ
 發著スル所ハ停車場
 デアル。汽船ノ通行ス
 ル路ヲ航路トイッテ



ハゲモノノ乳ヲノミ、マタツノ肉ヲ食フ
トモ、ユエナクコレヲ苦シメジ。コトニ
ワガ家ニカフモノハ、愛シツダテテソレ
ゾレノ、ツトメラサスル外ヅナキ。

第十八 ワガ國ノ農業

ワガ國ハ氣候ホドヨクシテ土地コエタ
ルガユエニ早クヨリ農業開ケタリ。サレバ
ワガ國ハ古ヨリみづほの國トトナベモツ

トモ農業ヲ重シジタリ。

イマアマネク國中ラメグルトキバイカ
ナル山間ノ土地ニテモ、田畑ヨク開ケテ穀
物野菜ノ生ヒ育ツヲ見ルベシ。

ワガ國農產物ノ主ナルモノハ五穀野菜
桑茶烟草麻綿等ナリ。コレラノ中ニハ國內
ニテ使用スル外盛シニ外國ニ出スモノモ
少ナカラズ。

農業ハワガ國ニトリテカクタイセツナ
ルモノナレバワレラハ今ヨリ後マスマス
勉メハゲミテ土地ヲコヤシ收獲ヲ多クシ
ワガ國ノ產物ヲ増サンコトヲハカルベキ
ナリ。

レシシユー

牛ハスナホナル獸ニテ歩ムコトオツケレドモ
ソノ力強クシテヨクハタラキニタゲマダソノ
肉ト乳トハ養分トナル。

食物や衣服のもとにはたいてい田畑からとるもの
のであるから農業はまことにたいせつなシゴ
トである。

第十九 にのみやきんじろー ①

二ノミヤキンジローはサガミノクニの
ひとでありました。キンジローのこどもの
ときにはそのいづがたうそーびんぼーで
ありましたからよるひるがきよーをてつ
だつてよくチヂ・ハにこーこーをつくし

文部省檢定

編輯所編 普及會社株式

國語讀本

尋常小學校
兒童用

東京

普及會社株式

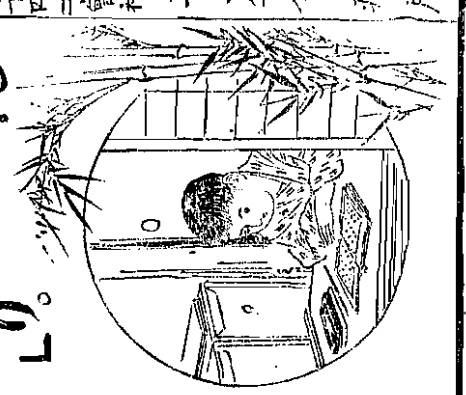
國語讀本 尋常小學校用 卷七 目次

第一	伊勢神宮	二	第十二	黄金のものがたり	三十八
第二	蒙古のあた	五	第十三	貨幣と紙幣	四十三
第三	源賴朝	九		レシエー	四十六
第四	鎌倉見物に友を誘ふ	十三	第十四	金銭の受け渡し	四十六
第五	虫と鳥	十四	第十五	キイト	四十九
第六	つばめ	十七	第十六	海陸ノ旅(一)	五十一
第七	若竹	二十	第十七	海陸ノ旅(二)	五十六
第八	水曾ノ山林	二十四	第十八	海陸ノ旅(三)	六十三
第九	日光山	二十七	第十九	わが國の工業	六十九
第十	空氣	三十一	第二十	豊臣秀吉	七十一
	レシエー	三十三	第二十一	黄海の戰	七十六
第十一	かみなりよけ	三十四		レシエー	八十

生れがひある 人たらん

おもひはらんと

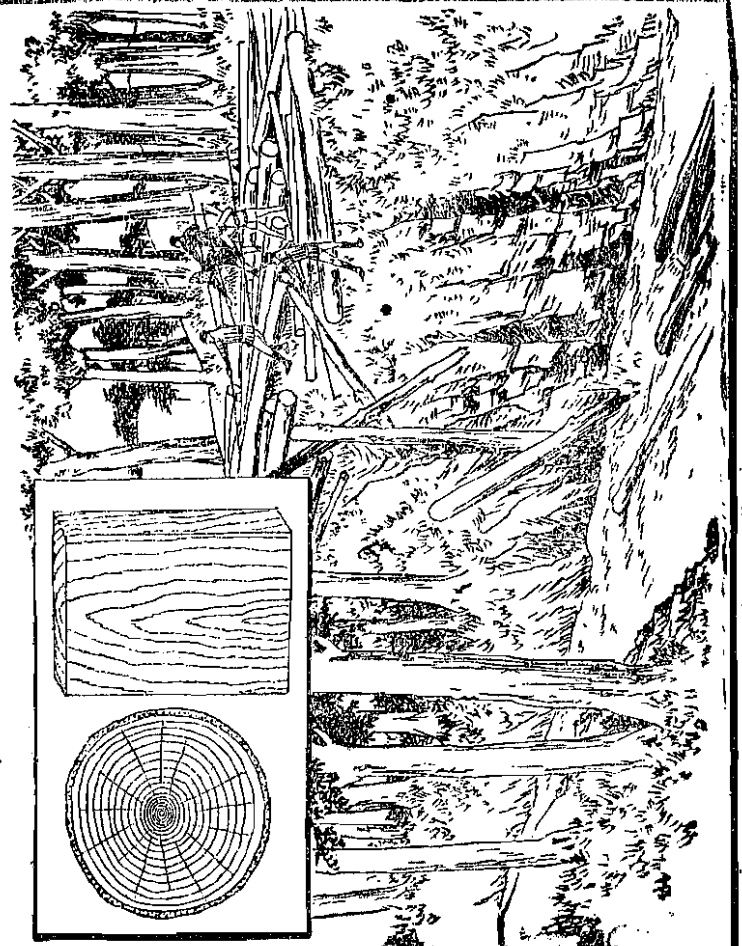
まえるなり。」



第八 木曾ノ山林

木曾ハ信濃ノ國ノ西南部ニアル土地テ
アリマス。昔カラ、木曾街道^{カイダ}トイツテ、東國カ
ラ京都ノ方ニ出ル道ニアタツテアリマス。
木曾ニハ、大キナ山林ガアツテ、イロイロ

ノヨイ材木ガ出
マス。ひのき、は
らこ、やまぎ、あ
すひ、ぬずこ、木
曾ノ五木トイツ
テ、世間ノ人が、タ
イツトモテハヤ
シマス。コノ他、け



子老しぬ老しむもみからぬのナドモタク
サシアリマス。

コノ山林ノ材木ハツノタチガタイツ一
ヨクアリマスカラ昔カラツノ名ガ高イノ
デアリマス。明治ノ御代ニナツテカラ官林
ト民林トラ別ケテニダリニ伐ルコトラト
イマシタカラ木ガマスマス生ヒ残ツテキ
マス。

マタコノ山ノ中カラ流シ出ル谷川ハ大
小合セテ二千餘流アツテニナゲハシイ岩
石ノ間ヲ流シマスカラ風景ノヨイ場所ガ
タクサシアリマス。

第九 日光山

然
呼

日光山ハ下野ノ國ニアリ。自然ノ景色ノ
美ナルガ上ニワガ國美術ノ第一ト呼ビレ
タル東照宮ノ社殿アリテツノ名コトニ高

レバイツレモ乗リカヘラスルモノ少ナカラズ。

小山ヨリ武藏ノ大宮浦和田端ヲヘテ東京ノ上野ニ著ク。時ハ九月二十八日ノ午後十時ナリキ。

第十九 わが國の工業

わが國人は昔より、手わざの業にたしみにて、刀に劍弓に矢に、塗物、もの。

漆

ぬ・生糸、焼物などの工業は、はやく開けて、美しき品の今なほのこれるは、寺に社に數多し。その工業の中にても、今も盛んに行はれ、外國までもひよーばんのよきは、焼物絹生糸。ことにすぐれし漆塗。京都の織物、日本一。生糸は、信濃、甲斐、越後、上野、若狹、加賀、羽前、常陸、岩代、名産地。備後表に、姫路、筆、鉾子の醤油、灘の酒

臺灣、砂糖、阿波の藍、その外、造船、製鐵の業も、年々進みゆく。國の未來のたのもしや。いでや、われらも世に立たん、おもひおもひの工業をつとめて、増さん國の富。

第二十 豊臣秀吉

秀吉ハハジメ、木下藤吉郎ト名ノリ、織田信長公ニツカヘテ、草履取ヲシテキマシタ。

(2175)

明治33年初版
濟定檢省部文(357)

株式會社普及舎編輯所編

國語讀本

尋常小學校
兒童用

東京 株式會社普及舎

121
1
38-8.2

38-8.2

國語讀本 尋常小學校用 卷八 目次

第一	わが國體	二	第十一	國史の大要(二)	三六
第二	忠臣のかみ	五	第十二	國史の大要(三)	四三
第三	やまと心	九	第十三	紀元節の歌	四八
	れんしゅー	十二	第十四	町村と府縣	五一
第四	ひとのがらだ	十二	第十五	議會と政府	五五
第五	養生	十六		レンシエー	五八
第六	病氣のみまひ	十九	第十六	村民の美風	五九
	れんしゅー	二十	第十七	兵役と租税	六三
第七	淺草水族館	二十一	第十八	軍人ノカガミ	六七
第八	田中平八	二十五	第十九	世界一周	七一
第九	大黒天のつち	二十六	第二十	貿易	七八
第十	銀行と會社	三十一	第二十一	すめらみくにの歌	八一
	れんしゅー	三十五		れんしゅー	八三

して「どうもあなたのツチからタカラモノ
をうちだして下さうませ」といつて一心に
をがんでをりました。

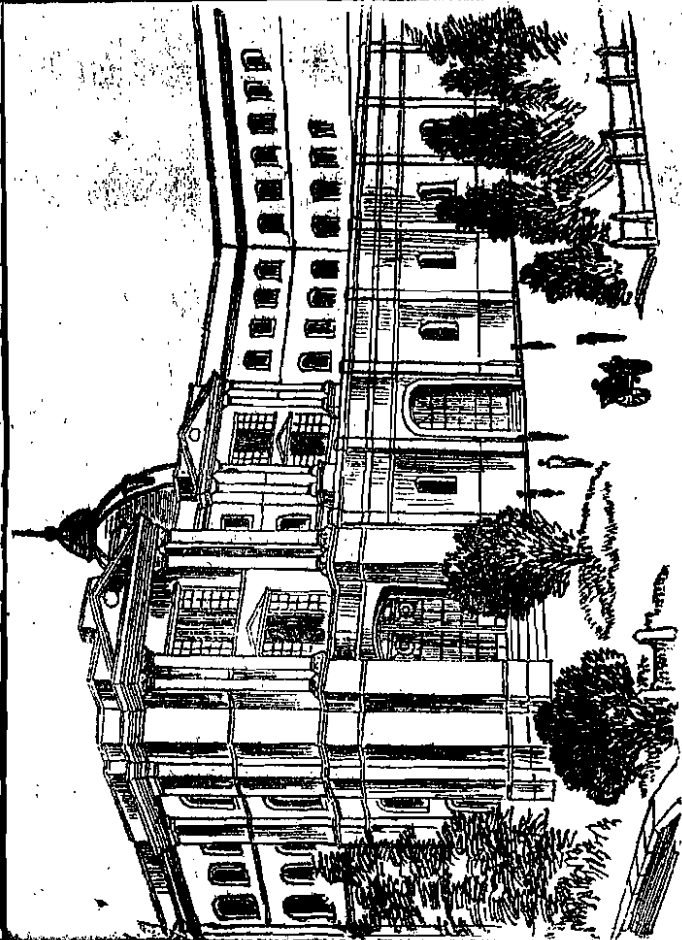
するとちよーと一週間目のこれになつ
て大黒天がにはかにづかづかと進んでお
うどになつてそのツチをもつてナダケモノ
の頭をおうちになりました。ナダケモノは
びっくりして目を見はてをりますと、おがッ

チはタカラうち出すツチでなし。「タカラ
モノの頭うつツチ」といふ聲が聞えました。

それからこのものはゆめがさめたよー
になつてたいそ一家業をばげみおひおひ身
代をとりなほしたといふことであります。

第十 銀行と會社

産業を営むに資本の足らざる人は他人
より資本を借り入るることを要し、資本の



餘れる人はこれを
他人に貸して利子
を收むべし。この二
つの者の間に立ち、
資本金を積み立て
なほ人の餘れる資
本を低き利子にて
預り、これを不足な

るものに平や高き利子にて貸しつけなど
するものを銀行といふ。

銀行は、金銭の融通にたいせつなる機關
にて、すこしの金銭をも預かるを常とすれ
ば、人みな金銭に餘りあるときはこれを銀
行に預けおくをよしとす。

すべて人が多分の資本を要する事業を
営まんとするに、一人にてその資本をとし

組

限任責

のべがたきときには、二人以上資本を合せて、營業を始むることあり。これを會社を組むといふ。そのあひ合したる人々を、出資人または社員といふ。出資人の責任には、有限と無限とあり。無限責任のものより成る會社を合名會社といひ、有限責任無限責任二種のものより成る會社を合資會社といふ。會社の損失に對し、有限責任のものは、その

込拂發干額

出資金限りこれを引受け、無限責任のものは、その財産のあらん限りこれを引受く。

また、總資本金を一定の金額に分ちて、若干の株となし、株券を發行し、株金の拂込高によりて利益を分配する會社を株式會社といふ。株式會社の出資人は、たいてい、有限責任にて、これを株主といふ。

銀行は、人々の餘りある金銭を預りおきて、これ

東北のエビスを平げしめて皇威を東西に
かがやかしたまひき。

紀元九百年の頃 神功皇后は三韓を征
伐してはじめて海外に領地を開きたまひ
き。これより三韓との交通盛んになり、皇
後の御子 應神天皇の御代に至りて學者
職工など多く三韓より來たりわが國の學
術工藝やうやくおこりぬ。

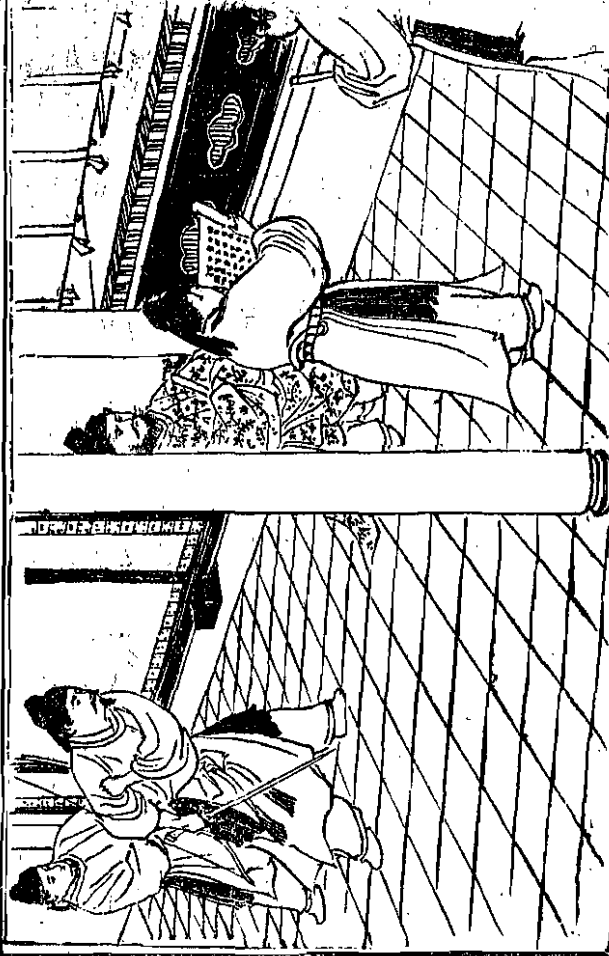
傳

紀元一千二百年 欽明天皇の御代に佛
法はじめて傳はりぬ。この事よりして大臣
蘇我氏と大連物部氏との間に爭論おこり
しが蘇我氏つひに物部氏をほろぼしてひ
とり朝政をほしいままにしたり。

論

紀元一千三百年 皇極天皇の御代中大
兄皇子藤原鎌足とはかりて蘇我氏をほろ
ぼしやがて御位につかせたまひき。これ

基



天智天皇なり。天皇盛んに學校をおこし、大いに政治を改めて、ますます皇室の基をかためさせたまひき。その後、元明天皇の御代に都を大和の平城にさだめたまひ

き。これより七代七十餘年の間に文學美術、大いに進み、佛法もまた盛んにおこり。

紀元一千四百年の頃、桓武天皇都を山城の國にうつしたまひき。これ、今の京都なり。

紀元一千五百年の頃、藤原良房、清和天皇の攝政となれり。これより、藤原氏の威權日に盛んなりき。宇多天皇は、菅原道真を重

端

く用ゐて藤原氏の威權をおさへんとした
まひしに道眞むじつの罪によりて九州に
うつされ、天皇の御志空しくなりぬ。

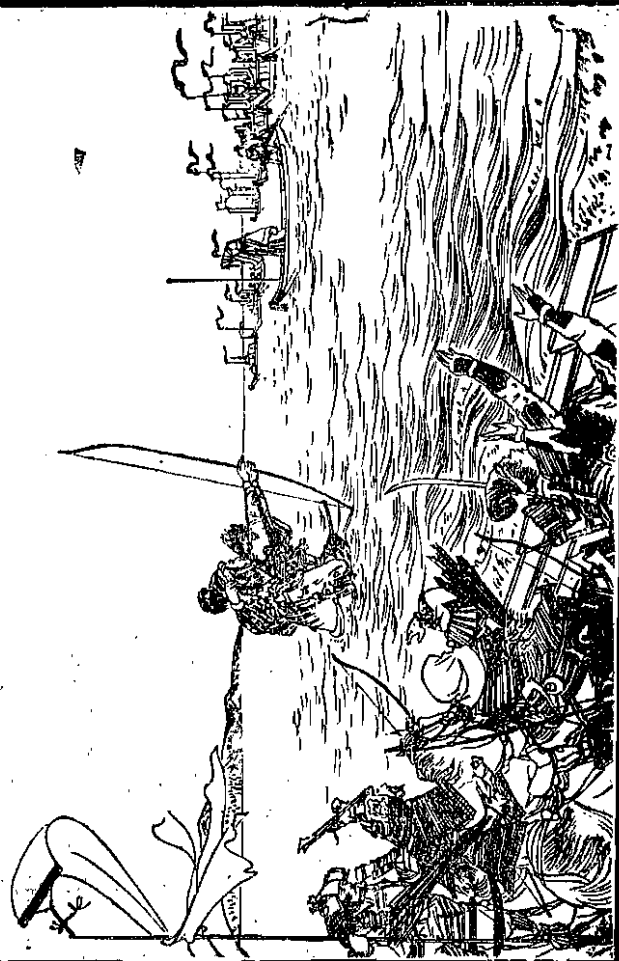
第十二 國史の大要 (三)

敬

紀元一千七百年の頃藤原氏の勢やうや
く衰へぬ。これより源平二氏の勢強大とな
りたがひに争ひしが平清盛つひに源氏を
ほろぼして大いにわがまをきはめたり。

その後源賴朝兵を
伊豆ヱヅに起し、その弟範
賴ヨリ義經ヨシをして平氏を
うたしめ、つひにこれ
を長門の壇ダンの浦には
ろほせり。

かくて頼朝は將軍
に任せられ幕府を鎌



倉に開きて天下の政治をとりぬ。これより、
 政權全く武門にうつれり。源氏のちすぢは、
 三代にてたえしがその臣北條氏さらに將
 軍を立ておのれその執權となりて天下の
 政をとり行ひたり。六代の執權時宗は蒙古
 のあだをうちあらひて大いに國威をかが
 やかせり。

八代高時に至りわがまきをきはめ政治

亂

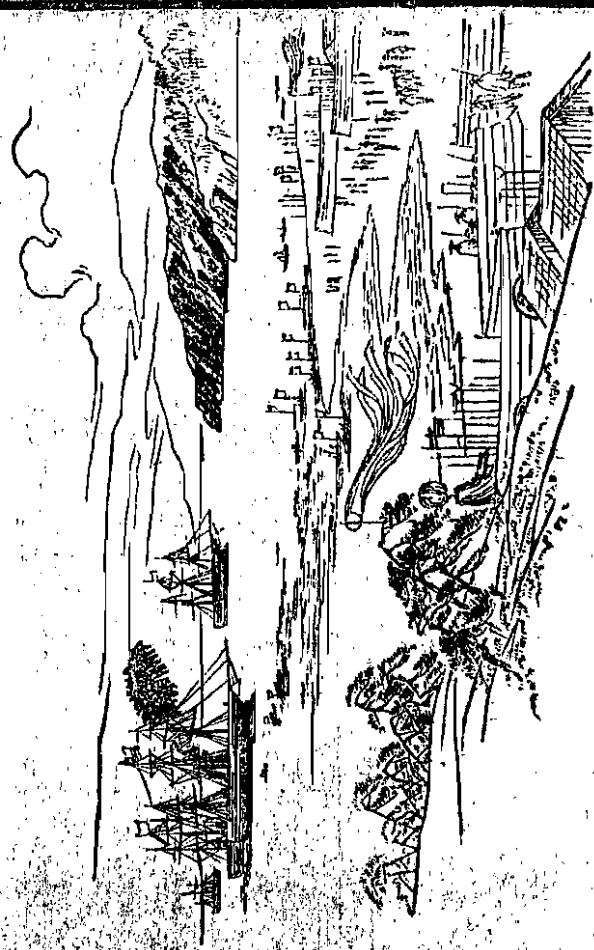
を亂だしたれば 後醍醐天皇新田義貞楠
 木正成らに命じてこれを伐たしめたまひ
 ぬ。高時自殺して北條氏ほろべり。これ紀元
 二千年頃の事なりき。

その後ほどなく足利尊氏むほんして別
 に 天皇を立て奉り朝廷南北に分れぬ。の
 ち五十餘年をへて兩朝合一したりしかど、
 政權は全く足利氏の手におち子孫政を執

ること十三代二百年にてほろびぬ。

足利氏の末天下大いに亂れ英雄四方に起りて戦争なかく續きしが織田信長豊臣秀吉あひついでその亂をしづめ天下ふたたび平定せり。秀吉はなほ餘力をもつて朝鮮を征伐し明國をおびやかし國威を東洋にかがやかしたれど中途にて薨じぬ。

徳川家康秀吉に代りて政を執り幕府を



江戸に開き三百年間の太平の基を開けり。嘉永六年米國の軍艦相模の浦賀に來たりて貿易を求めぬ。ここにおいて尊王攘夷の議論盛んにおこり天下大いに亂れんとせ

り。第十五代將軍慶喜に至りつひに政權を朝廷に返し奉りぬ。

これより、今上天皇みづから政を執らせられひろく外國と交はり武備をそめ、學校を設け、憲法をそだめ、帝國議會を開きたまひ國のいしずえますます固く國の光りいよいよかがやけり。

第十三 紀元節の歌 (高嶺正風作)

その一

雲にそびゆるたかちほの
たかねおろしに草も木も
なびきふしけむおほみよを
あふぐけふこそたのしけれ。

その二

うなばらなせるはにやすの
いけのおもよりなほひろき。